MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

2019. 12. 22　発行元

第 21 号　伊藤　剛

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリの始祖E・A・ポオの世界

この『読書案内』に海外ミステリ・古典とも呼ぶべき古い作品を連載していたなら、急に「エドガー・アラン・ポオ」のことが書きたくなってきた。やはり、ミステリの始祖を書かなければ何事も始まらないということ。

小学生の時から読んだ！

エドガー・アラン・ポオ（１８１１年～１８４９年）は、アメリカ文学のひとつのピークを形作る大作家であり、その後の世界の文学全体に与えた影響は計り知れないものがある。

そんな意味で、１９６０年代から７０年代の各種の文学全集にも取り入れられていたので、私にとっては、小学校から読み始め、慣れ親しんだ作家で、繰り返し繰り返し読んだ記憶がある。子ども心に、幻想と怪奇の部分で特に印象深い。

ポオの本は、いろんな出版社から文庫本が出ていたが、今は全部処分してしまい、私の手元に残しているのは創元推理文庫の『ポオ小説全集１～４』だけである。この４冊ですべてを賄える。

ミステリの始祖としての役割

右上の表に、私の独断と偏見に満ちたポオ作品のランキングを載せてみた。１位には『黄金虫』を挙げた。後述のジュリアン・シモンズは、「ポオのミステリの中ではいちばんつまらない」と評しているが、私には一番懐かしい。暗号ミステリの元祖。雰囲気に流されず、理論的で話の構造がしっかりしていると思う。小学生ながらに「へぇ～、英語ってそんな特徴があるんだ。すごいなぁ。」と感動した作品。

２番目はミステリの出発点となる『モルグ街の殺人』。１８４１年の作。最初の名探偵オーギュスト・デュパンの誕生。密室殺人事件の元。意外な犯人？　いろいろな要素がこの一作に含まれている。多くの人は、こちらを１位に挙げるのだろうと思う。

以下、『盗まれた手紙』『お前が犯人だ』『マリー・ロジェの謎』の５作がミステリ、推理小説としての分類になっている。

作風は多彩で、怪奇……

ポオは詩人としても偉大であり、怪奇・幻想小説、ＳＦ的な小説、ユーモア小説と幅広い作風を作り出している。３位に挙げた『黒猫』もよく知られている作品で、子どもの頃には、非常にコワ～く感じられたものだった。ミステリの中に含めてもかまわないと思うのだが。

大人になってから読んだ『アッシャー家の崩壊』や『メエルシュトルムに呑まれて』なども、子ども時代に感じた想いとは別の雰囲気があって、感慨深いものがあった。

『陥穽と振子』は、子ども時代から好きな作品。別に「ミステリ」という枠にこだわらずに、ポオの諸作は、「また読み直してみたい」と思わせるものがある。人を引きつけるものを持っているのだ。

今の時代、ポオのことは忘れ去られつつあるように感じている。今の小・中学生にとってはどうなのだろうか。是非、読んでほしい！

《ポオ作品・私好みのランキング》

１．黄金虫
２．モルグ街の殺人
３．黒猫
４．盗まれた手紙
５．「お前が犯人だ」
６．マリー・ロジェの謎
７．陥穽と振子
８．アッシャー家の崩壊
９．メエルシュトレムに呑まれて
１０．壜のなかの手記
１１．早まった埋葬
１２．ちんば蛙
１３．ナンタケット島出身の
　　アーサー・ゴードン・ピムの物語
１４．モレラ
１５．メルツェルの将棋差し
１６．アルンハイムの地所
１７．告げ口心臓
１８．リジイア
１９．鋸山奇談
２０．ウィリアム・ウィルソン

一応、２０作品を選んでみた。小説の形を取った作品はまだまだあるが、２０編を並べてみれば、ほぼ様子をつかむことができるのではないだろうか。

J・シモンズの評伝・評論

ポオの評伝・研究書として有名なのは、ジュリアン・シモンズの「E・A・ポオの生涯と作品」と副題がつけられた『告げ口心臓』。日本語版は１９８１年に東京創元社から出版されている。シモンズのミステリ作品そのものは、私にとっては今ひとつだが、この評伝はしっかりと、よく書かれている。

この本を手に取る機会があれば、お読みいただきたい。

ジュリアン・シモンズについて少しだけ…１９１２年生まれのイギリスの推理作家。代表作としては、解決のない『殺人の色彩』、アメリカ推理作家協会賞受賞の『犯罪の進行』、実験的な手法を取り入れた『妻を失った男』などが挙げられている。私が読んでいるのは、創元推理文庫から出ている『ねらった椅子』だけ。サスペンス・ミステリ。印象に残るほどの出来ではなかったと記憶している。